

『マッシュヴ・ダークネス』の光の勇者たち！

ビョルン Bjorn

「臆病者め！ 煉瓦や石の陰に隠れてないで顔を見せろ！ このビョルンと相まみえて、死ぬがいい」

種族：人間

推奨クラス：シャドウ・バーバリアン



光もたらす者（ライトブリンガーズ）の足跡が残る遺跡の上に、数多くの輝かしき都市や帝国が建てられた。だがビョルンは、そんな文明とは無縁の男だ。彼が所属する“影の部族”は、「古きよき」野外生活を続けていたのである。生きるために幾つもの困難な戦いを切り抜け、屈強な偉丈夫となった。

「闇と戦う」という決断は、極めて容易なみのだった。どだい怪物は倒さねばならぬ。さもなくば苦境に立たされるのは自分の部族だ。家族をなによりも大事に思うビョルンにとって、部族の危機は看過できない。

ウィスパー Whisper

「シーッ……誰にも聞こえやしないよ。気にもされてないさ」

種族：人間

推奨クラス：ブラッドムーン・ナイトランナー



月蝕の結社（ブラッドムーン・ソサエティ）に身を捧げる者の例に漏れず、ウィスパーは隠密と狡猾の化身だ。「この鋭き短刀と共に、宵闇を武器のように振るおう」と誓った彼女は、まさしく暗がりや影の申し子なのだ。他の者が身を隠すには、何かの陰に潜むしかない。だがウィスパーは、まさしく暗黒を身に纏い、まるで墨のように影に身を沈める。そんな漆黒の恩恵を享受する者が、“闇”と戦うなどおかしい話だと思いかもしれない。だがウィスパーは、怪物帰還の陰に隠された真実を知っている。やつらを滅さなければ、自分たちの棲み処である影が奪われてしまうということを……

エリアス Elias

「アズリマン……ネイフェアス……ゾンドロバアよ！ 還れ！ 汝ら醜悪なる者よ、元なる場所へと還るのだ！」

種族：人間

推奨クラス：バトル・ウィザード



かつての戦いでは、ライトブリンガーズにとって魔術こそが“闇”を退けるカギとなった。そして再び、そうなるであろう。だからこそエリアスは、古き魔道書を読み耽り、いにしえの魔術を鍛錬してきた。数年前、“闇”が帰還する兆候を目にした彼は、自分を始めとする新たな英雄到来のための準備を怠らなかった。自身の人生は、このためにこそあったのだ。闇を封印する、今回こそは永遠に……そんな究極の目的のために！

シビル Sibyl

「私はあなたのおじいさまが子供の頃からずっと怪物を殺し続けきたわ。だから、そこをどいて」

種族：エルフ

推奨クラス：ナイトシェイド・レンジャー



暗所にゴブリンその他のバケモノが帰還したことで、エルフは危難の時を迎えた。遠い昔に忘れ去られた伝統を復活するしかなかった。宵闇の一団（ナイトシェイズ）、すなわち弓を引き絞り、剣を研ぎ、怪物を屠る者たちである。シビルもその立派な一員だ。初めて放った矢で敵が地に倒れ伏したとき、怪物狩人こそが天命だと悟った。そしてその狩りの道こそが、“闇”の使徒を追い詰めることになるとは、まだ気づいてはいなかったのだ……

オーウェン Owen

「光よ、我が身に宿れ。光にこそ、勝利があるのだ」

種族：人間

推奨クラス：パラディン・オブ・フューリー



かつてのライトブリンガーズは、最後には道を見失ったのやもしれぬ。けれどその気高き魂を受け継いだ者もいる。激情の聖剣士である。オーウェンは信心深く、心身のバランスを誇り、光の名の下に善良なる民を脅かす連中と戦った。“闇”や、その怪物どもが帰還したと見えると、オーウェンはただちに聖なる鎧を纏い、聖油を剣に注ぎ、聖戦へ向かった。敵はすぐ、誠に正しき者の力を知ることになる。

ジークフリート Siegfried

「キサマが死を所望するというなら、案ずるな……今すぐ、くれてやろうぞ！」

種族：ドワーフ

推奨クラス：ピットファイター・バーサーカー



幾千もの血が流れた〈三ッ骨窪〉の闘技場は、何世代にも渡って大衆を楽しませてきた。そんな野蛮な地で生まれたジークフリートにとって、ドワーフ族の伝統などどうでもよかった。暴力への燃えるような渴望を満たすことこそが第一だった。雄たけびと共に、人や獣や怪物の血にまみれた愛用の槌を振るい、臆せずその身を投げ出していく。強敵を打ち倒すたび、自分を謳う叙事詩に、輝ける一節が加えられるのだ。そしていつの日か〈“闇”を打ち倒し者〉の称号を、自身の伝説に加えるのだ。

『ゾンビサイド^{ブラック・プレイグ}黒 疫 禍』より参戦！

アン Ann

「屍者だって？ ハッ！ このあたしにかなうわけなんかないさ！」

種族：人間

推奨クラス：ウォーリアー・プリースト



何年も前のこと。近隣の領主の略奪隊が、とある村を壊滅させた。幼きアンは、そのたったひとりの生き残りとなった。森へと逃れ、寒さと飢えで苦しむなか、蛮族の狩人たちに保護された。しかしあまりにも小さいアンを連れてはいけないと判断した蛮人たちは、近くの修道院に預けた。アンはそこで育ち、修道院の図書館と、付近の森での冒険から多くを学んだ。こうして生き抜く術に熟達したアンは今、屍者の脅威が迫る文明世界へと戻ってきたのである。手ごわき獲物を狩るために。

バルドリック Baldric

「魔法は所詮道具。真の力は知識だ」

種族：人間

推奨クラス：バトル・ウィザード



バルドリックはかつて、偉大な冒険者であった。神秘的で強大なその魔法の数々は、伝説として語り継がれていた。しかしバルドリックは、日頃から魔力よりも知識の探求にこそ重きを置いていた。特定の敵にどんな魔法が効くのかを熟知していた彼だからこそ、老齢になるまで生き延びることができたのだ。やがて魔法学校を開設し、教を広めた。古の知識を『神秘』のままにしておきたい他の魔法使いたちからは、大いに批判された。だが屍者の侵攻により、すべては変わってしまった。今のバルドリックは、自分が必要とされる場所へと赴き、屍者の顔を吹き飛ばす魔法を、欲する者たちに教えている。

クローヴィス Clovis

「この世の終わり？ 俺にとっては違うな。貴様にとってはそうだろうさ！」

種族：人間

推奨クラス：ノーブル・ウォーリアー



法を尊ぶクローヴィスが、聖騎士となったのは自然な流れだった。だが、それも昔のこと。法が必ずしも善と悪、もしくは白と黒を別つものではないことを、身をもって悟った。仕える領主の手を汚さぬために、多くの汚れ仕事を担ってきたのだ。しかし文明社会が崩れつつある今、領主たちは怯えることしかできなかった。クローヴィスは遂に「栄光とは、輝ける盾と貴族への忠誠ではない」と気づいた。真の栄光とは、自らの所業をもって得るものであると……

サムソン Samson

「下がってろ、小僧。こいつはドワーフの仕事だ」

種族：ドワーフ

推奨クラス：ボーンクラッシャー



サムソンには、ドワーフの技に向けられる人間の好奇の視線が奇妙に思えた。同じ金属、同じ製法、そしてほとんど同じデザインの剣やハンマーなのに、ちょっとルーンを刻んだだけで、魔法が宿ったかのように珍重されるのである。ドワーフが作ったというだけで、より早く振ることができ、より強靱で、より長持ちすると信じられていた。そんなわけでサムソンは、自分で鍛造したドワーフ印の武器を売って生計を立てていた。有能な鍛冶屋であったため、品質について偽る必要もなく、優れた武器を作成し続けてきた。そして屍者どもの侵攻が迫る現在、サムソンはそのドワーフの技で、どんな武器だろうと喜んで鍛え直すのだ。

ネリー Nelly

「生き残るにはリスクを冒さなきゃね」

種族：人間

推奨クラス：シャドウ・バーバリアン



幼少期から酒場の女給として働いていたネリーは、人生の閉塞感に息が詰まっていた。若く美しい女性に降りかかりがちな、貴族の愛人となったり、娼館で働いたりという罠は、慎重に避けた。それでも夢想家で快活なネリーは、漠然とだが、今以上の人生を求めていたのだ。屍者が到来するまでは。屍者を棍棒で殴ることは、自分に手を出そうとする客をピアジョッキで殴るのと大差なかった。ほとんどの武器の扱いに対して、実は天性の才能があったネリーは、ようやく人生の目的を見出した……すなわち屍者虐殺（ゾンビサイド）だ！

サイラス Silas

「屍者は生命と美に対する冒涇。わたしはそれを正しに来た」

種族：エルフ

推奨クラス：ナイトシェイド・レンジャー



エルフは長命な種族だ……屍者に殺されなければの話だが。これこそサイラスが、頭の固いエルフの王族の頭に叩きこもうとした事実であった。行動を、それこそ迅速な行動を求めた。しかし数百年も生きるエルフである。議論に議論が重ねられ、まともな決定がなされるには、まだ何年もかかりそうだった。業を煮やしたサイラスは、個人的に屍者との戦いに身を投じた。自分にも救える命はある。世界のために善を成すのだ。屍者の群れから人々を救うには、すべての種族の団結が唯一の道であると信じて。

『ゾンビサイド^{ウルフスブルク}狂狼砦』より参戦！

アリアン Ariane

「……で、こんなときに法ってやつは、一体全体どこで何をしてるのかしら？」

種族：人間

推奨クラス：ブラッドムーン・ナイトランナー



浮浪児だったアリアンは、長じてすばしっこく頑強になり、衛兵をいつも鼻先でかわしていた。盗賊ギルドに加入したはいいのものの、別のギルドの依頼もこなした。しかも何度もだ。だが、このあいだの依頼については、後悔してもしきれない。都市の門を開ける鍵、すなわち市長の持つマスターキーを盗むために雇われたのだ。雇い主の正体が死霊術師（ネクロマンサー）だとも知らずに……その雇い主に仕掛けられた罠と、屍者の魔手から何とか逃げおおせた今のアリアンは、救いを求める者に手を差し伸べるようになった。誰も、彼女の後ろ暗き秘密には気づいていないはずだ……今はまだ。

カール Karl

「ああ、お前さんだって習得できるさ。ああ、手首だけで回してもダメだよ」

種族：人間

推奨クラス：バトル・ウィザード



工兵としての従軍経験は、カールを百戦錬磨の強者にした。王室の攻城魔術師と連携して作戦に当たることが多かったカールは、彼らの神秘主義や儀式が、基礎的な定理や難解な法則を隠すためだけのものであると悟ったのだ。すなわち魔術は科学なり！その異端的主張が徐々に広まってくると、カールは収監の危機にさらされた。だが屍者が街道を埋めつくした今、この都市や人々には、マナを炎に変換できる者が必要なのだ。たとえそれがどんなヤツであっても！そしてカールは、この暗黒時代を乗りきる唯一の方法が、自身の教義を広めることだと信じていた。

モリガン Morrigan

「卑怯とな？ よかろう。生と死の違いについて、汝に教えてくれよう」

種族：ダークエルフ

推奨クラス：ソーサラー



ウルフスブルクへ派遣されたダークエルフ大使の、護衛として同行していたモリガンは、パラノイアが何たるか熟知していた。「最良の時でも警戒を怠らない」と評されるダークエルフのなかでも、彼女ほど暗殺の恐怖と隣り合わせで生きて者はいないのだから。だが何たることか、大使は踏みとどまって戦う道を選んだ。屍者の群れと果敢に対峙し、モリガンのみが生き残った。故郷から遠く離れた地で、彼女の誇りは大使と共に死んだ。だからこそ、新たな人生を始めることにした。この歴戦の勇士の戦いざまを目の当たりにした人々は、種族的偏見を抱いていた過去の自分を後悔し、その剣術や助言に敬意を払うようになった。

テオ Theo

「俺は民のためにここにいる。荒れた都市のためなんかじゃない」

種族：人間

推奨クラス：ナイトシェイド・レンジャー



テオは野伏(レンジャー)として都市部から離れ、知恵と技術を頼りに山野で暮らしてきた。故に異変に気がついたのは、捕食のためでなく、ただ殺すだけの屍狼を見かけたときであった。あんな感染症は見たことなどない。苦痛と闇の魔術の匂いがした。きっとウルフスブルクで恐ろしいことがあったのだろう。そう感じて現場に駆けつけ、真実を知った。そして新たなる使命に目覚めた。愛する森が荒らされる前に、屍者の軍勢を押しとどめ、黒疫禍(ブラック・プレイグ)の治療法を見つけださねばならない。

『ゾンビサイド^{グリーン・ホード}緑鬼軍』より参戦！

アシーム Asim

「私の名は正確には……いや、よしておこう。ただアシームとだけ呼びなさい」

種族：人間

推奨クラス：パラディン・オブ・フューリー



アシームは大胆不敵な商人であった。新天地を探検し、新たな友を作り、商いを行った。7年の活動によって、その名は広く知られ、スルタンより「凍える北の国々への使者となれ」と依頼された。合理的な男であるアシームは、緑鬼が攻めてきた時には武具を安く売りさばいていたが、いよいよ屍者が都市を侵攻してきた時には自身も剣をとり、嗜み程度の武術を披露するより他なかった。驚くべきことにその技は優れたものであり、ほどなくして生存者の戦闘部隊へと加わることになった。故郷へ戻れる日は近いのか？ それはアシーム自身にも分からない。だが死に直面した彼は、おのれの人生に新たな意味を見出したのである。

ベリン Berin

「この〈轟雷なる破錠の魔斧〉は一時たりとて手放せぬ。万が一のためゆえ」

種族：ドワーフ

推奨クラス：ピットファイター・バーサーカー



心の底から冒険者であったベリンは、常に栄光を求めてきた。財宝と厄介事こそ、彼の人生なのである。ダンジョンに潜るのが好きで、怪物を倒すのは趣味と言っても過言ではない。地方領主より「財と栄誉のため、緑鬼と戦って欲しい」との依頼を受けたベリンは、正面から挑み、勝ち続けた。自身のパーティが屍緑鬼に遭遇するまでは……

長き戦いの末、失った仲間の司祭のために復讐を誓った。最初に死霊術師を倒せた戦いでも更に仲間を失い、仇を討つと重ねて誓い……数週間後には自分独りになっていた。だが他の生存者たちが彼を見つけ、仲間に加えた。そして世界は倒すべき怪物だらけの巨大なダンジョンと化したのだ！

ヨハネス Johannes

「この新発明の使用法をお訊ねか？　しか
とは知らぬ。まあ、喰らえばわかろう！」

種族：人間

推奨クラス：ナイトシェイド・レンジャー



発明に没頭しすぎて謙虚なヨハネスは認めはしないだろうが、この暗黒時代、彼こそが最も賢い発明家のひとりであることは間違いない。科学こそが彼の母国語。王による寛大な支援のもと、その発明品は人々の日常生活に役立っているのである。もちろん敵もいる。教会は「かの発明は、悪魔に魂を売り渡したからこそ為せる業だ」と宣言した。彼自身、仕組みもよく理解せずに、日用品から武器や発明品を作ってしまうことがあり、それを揶揄した恥ずべき非難であった。

王が軍もろとも屍者に滅ぼされると、この発明家はかつての生きかたを捨て、屍者を狩る者となった。誰も自分の作品を懐疑的な目で見ることがなくなった今、ヨハネスはその技術を存分に振るうことができる。生存者たちの中でも、かけがえのない存在となっているのだ。

メーガン Megan

「知識とは力なり。緑鬼は爪を隠している
かしら？　してないわね。だから私もこの
知識の力を存分に披露するわね」

種族：人間

推奨クラス：バトル・ウィザード



盗賊一味の後継者であるメーガンは、幼い頃より類稀なる知能の片鱗と貪欲な知識への渴望を示していた。魔術師の道を選んだ彼女は、家族である盗賊ギルドの支えもあり、ありとあらゆる本を読むことができた。長じるにつれ、少女は冒険者としての人生に足を踏み入れ、またとない傭兵となった。さらに経験を重ねたメーガンは、自分にとって必要な知識と力を理解し、緑鬼の地に位置する古代の墳墓を探すことにした。その時、屍者がやってきたのである。

年齢に見合わない聡明さをそなえたメーガンは、黒魔術の魅力を理解しつつも拒んでいる。そのため、死霊術師を滅ぼすために手を貸してくれる生存者を探している。メーガンは賢く、何も恐れない……内に潜む、闇への誘惑以外は。

ロルフ Rolf

「オークは我が仇敵。しかして誇り高き好敵手。死霊術師こそ万死に値する」

種族：人間

推奨クラス：シャドウ・バーバリアン



よい農夫になるには衝動的で、よい兵士になるには反抗的だったロルフは緑鬼狩人を生業とするようになった。同じく血気盛んな若者たちと共に、緑鬼の地との境界を見張り、襲撃を防ぎ、侵入者を罰してきた。当然ながら緑鬼狩人の生涯は短い。しかしロルフは、技と運に恵まれて多くの戦を生き延び、敵について学んだ。彼には血濡れで野蛮な緑鬼の方が、ある意味臆病で裏切りに塗れた人間よりも近しく感じられたのだ。

緑鬼の侵攻と死霊術師による黒疫禍の感染を最前線で体験し、憎悪を内に秘めながらも生き残った彼は、辺りで唯一の緑鬼狩人となった。随一の戦士であり、緑鬼の地に関するかけがえのない知識を得ていた。だがこの若者は、血への渴望によって周りが見えなくなり、自分に死が訪れるまで、虐殺の道に邁進するかもしれない。

シエリ Seli

「あれ……前に会ったことあった？ どっか知り合いに似てるんだよね。もしかしてあたし、あんたを殺し損ねたんだっけ？」

種族：エルフ

推奨クラス：ブラッドムーン・ナイトランナー



屍者の大群との激戦の後、シエリは遺骸にまぎれて意識を失っていたところを見つけた。このエルフの女戦士は、頭に受けた一撃が原因で記憶を失ったのだ……最初はみんなそう思っていた。だが事態はより深刻だった。なにかしらの理由で、シエリの記憶は数日しかもたないのだ。それが呪いなのか、怪我のせいなのか、それ以外の何かなのか、誰にもわからない。彼女の剣術には目を見張るものがあり、熟練の暗殺者に匹敵する運動能力を誇る。シエリは毎日のように、見知らぬ人々と出会い、過去との絆もない荒廃した世で目覚めるにもかかわらず、陽気な態度と独特な笑いのセンスを保ち続けている。それはある意味、悲しい光景でもあった。それにしても、彼女は一体何者なのだろうか？